

2017 霜月師走の夢「永世中立国と言え、スイス」

「アルプスの少女ハイジ」から連想するスイスは、酪農を中心とした牧歌的な農業を営む山岳国家というイメージです。しかも、筋金入りの永世中立国となれば、世界平和のシンボルであり、第二次世界大戦において悲惨な敗戦を喫した国 日本にとっては、国家経営のモデルとしたい国のひとつです。しかし、イメージだけでは国民の衣食住と誇りは満たされませんし、シンボルだけでは国の安全保障は担保されません。今日のスイスは、いったいどのようにして誕生し発展してきたのでしょうか？ そのスイスを訪ね、永世中立という稀有な国家生存権の確立の一端と、スイスを支える国力・経済力の底力を垣間見てきました。

スイスへ出発する直前、2017年9月22日(金)の読売新聞に、日本とスイスの知られざる歴史の一面が紹介されておりました。それは、・・・今から72年前の1945年8月、第二次世界大戦終結のポツダム宣言受諾において、スイスが取った仲介の労が日本の終戦に大きな役割を果たし、引いては、日本の戦後復興を早急ならしめたと考えさせるものでした。ポツダム宣言とは、1945年7月26日、米国・英国・中国の3カ国が日本へ向けて発した降伏勧告で、その降伏条件は日本の軍隊の完全な武装解除、戦争犯罪人の処罰などであり、日本政府は8月14日の御前会議で受諾を決めて降伏したというのが歴史の事実であります。一方、1945年5月、スイスが日本との断交を検討しており、もし実行されていれば、歴史が変わっていたかも知れないというのが歴史秘話であります。もし国交断交が行われていた場合、当時の紛争当事国 日本を利益を守る唯一の利益代表国であった永世中立国スイスという外交カードを失うこととなり、スイスを通じてのポツダム宣言受諾ができず、対米関係の外交交渉が頓挫、結果として終戦が遅れて日本の被害が拡大していた可能性もあったということです。・・・可能性のひとつとしては、日本の4分割統治論があったということをおつて歴史教科書で学びました。

さて、スイスが日本との断交を検討した経緯はどのような理由によるものだったのでしょうか。・・・国文学研究資料館の加藤聖文准教授が、ベルンのスイス連邦公文書館で、日本との外交交渉を記したスイス外務省の資料の中から確認した内容によると、1945年2～3月、日本軍と米国軍が戦ったフィリピンのマニラ市街戦でマニラ市民ら10万人が犠牲となる中、多くのスイス国民が日本陸軍の兵士によって殺されたことが、断交を検討する理由となったようです。結果的には、スイスは利益代表国を続け、ポツダム宣言受諾までの日本・米国間外交交渉の仲介を務めました。加藤准教授の推測によれば、「スイスは利益代表国の役割を果たし続けることで、中立国の利点を世界中に証明しようとしたのではないか」と記されています。・・・ここに、スイスの永世中立を担保する強かな国家戦略の一端が窺えるように感じます。

歴史に「もしも」があるとすれば、日本の4分割統治が現実のものとなっていたとしたら、そんなことは考えただけでもゾッとしますが、ドイツ東西分断や朝鮮半島南北分断どころではなかったのではと考えます。未だに、北方4島は返還されていないというのが、歴史的事実ですから。

さて、2017年9月28日(木)、スイス最初の経済視察先はチューリッヒ、UBS社で、永世中立を貫き、世界の富裕層の資産を集めてきたスイスの歴史的背景を学びました。領土拡張を狙って欧州の国家間で戦乱の絶えなかった中世、スイスは1515年に外国に対して武装中立を宣言して以後、他国間の紛争に関与しない立場を貫きました。17世紀頃には商業交易が盛んになり、為替取引を含む金融業が欧州の中心に立地するスイスで急速に発展、富裕層の資産運用・管理に特化する銀行も誕生、王侯貴族など周辺諸国の富裕層の資産の避難先として選ばれていったそうです。スイスは2度の世界大戦や大恐慌においても、敗戦後の資産没収、債務不履行やハイパーインフレを恐れた資産家の資金を集め、銀行秘密を国の

法律で義務付け、「スイス＝プライベートバンク」というブランドを不動のものとしたようです。1848年に現在のスイス連邦がスタートし、1862年にUBS社の歴史が始まったそうですが、その頃の日本はまさに明治維新の草創期真っ只中です。日本の利益代表国スイスは明治維新から始まり、日本の富裕層に引き継がれ、今日に到ったものではないかと推察いたします。

9月29日(金)、スイス3番目の経済視察先はベルン州ビールのオメガ社、スウォッチグループの傘下に入って復活を成し遂げ、時計メーカーとして再び大躍進する姿を、日本人建築家が設計し完成間近の時計組立新社屋ビルを案内してくれた社員の誇らしげなスピーチの中に感じ取りました。オメガ・ミュージアムには同社のブランドの数々が陳列されており、腕時計スピードメーターを着けてアポロ11号から月面に降り立った宇宙飛行士のコーナーなどは、圧倒的な迫力で私に迫ってきました。ニール・アームストロング船長の名言、「これは一人の人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては偉大な飛躍である」、将にオメガ・ブランドにとっての絶好の借景であると言っても過言ではないでしょう。オメガ社のブランド戦略、本当に、ただものではないと感じ入りました。

『スイスの凄い競争力 SWISS MAIDE』(R.ジェームズ・ブライディング著、北川知子訳、日経BP社2014年11月4日発行)には、スイスの特色が数多く語られています。序文の中に集約された一文を引用すると、「中世のスイスは山間の貧しい社会であり、主な輸出品は他国の戦争で活躍する傭兵だった。・・・1970年代の経済危機でも深刻な打撃は受けず、2007年以降の失業率はEU平均の1/2以下である。・・・スイスのイノベーションは多岐にわたり、繊維、観光、食品、エンジニアリング、医療技術、化学・薬品、貿易、保険、銀行、建築、建設、時計、と幅広い。・・・開放性は重要な特質だ。代表的なグローバルブランドを築いた逸材の多くは、政治の迫害や貧困から逃れるためにスイスにやって来た他国民だった。・・・小国であることによって、政府の介入の余地、特に政府主導の経済発展に対する期待は制限される。・・・スイスでは、経済の再生は起業家精神にかかっている。」この本をプレゼントしてくれたのは、UBS社の石田健吾さんです。彼の熱い、スイス由来のスピリットに心から感謝します。

まだまだ窮め足りないスイス、再び訪れたいと思う国がひとつ、また増えました。

(文責 アーキジオ春秋)



ユングフラウヨッホから望む氷河



月面に降り立つスピードメーター(オメガミュージアムにて)